

近世文人の内面

—上田秋成論—

田川邦子

『胆大小心録』は上田秋成最晩年の、おおかたは記憶にのみ頼る記述で、鋭利な自意識と、これまた鋭い認識と批判の横溢する短文の集積、「彼の精神生活の総決算、秋成その人を知る最良の資料」(中村幸彦『古典文学大系』解説)といわれるように、秋成その人をもっともよくあらわしている。

秋成は自己表現の手段として、(書く)より他のことは問題にもしなかつた人ではないかとの思いを、『胆大小心録』を読み返す毎に深くする。友人も論敵も身内も縁者も次々と世を去り、自らも墓を作つて死の準備を終え、眼病を患いながらもなお一人筆を走らせる最晩年の秋成にとり憑いていたもの、それは自分の(生)の断片のすべてを、最後のひとかけらをも残さずに語り尽したいという執念と情熱であつたのではないか。まさに書くことのデーモンにとり憑かれた姿といえる。それは回顧録や自伝を書くことと違つていた。回顧録や自伝には見えないところに何らかの紛色、自己合理化の手順がかくされているかもしれない。そういう合理化の手順などを必要としない、純粹自我にのみ対座する別格の世界に、彼自身とうの昔に退避をとげていたのだから、いまさら自分を飾ることも必要としない。

すでに『春雨物語』を書き終え、そこに自己のあらかたを投影し尽した秋成は、ここで筆を擱いても、作家として不足もなかつたは

ずだ。だのに秋成にはまだ書き足りない何者かが残つたのではなかつたか。それが何であるかは、『胆大小心録』に語つてもらふ他はないが、学問にも小説にも投影し尽せなかつたもの、卑近な日常性の中で、感情生活や精神生活に固着し、わだかまりとなつて生涯蓄積してしまつたものである。浮世草子はもちろん、『書初機嫌海』

『癩癖談』のような作品の素材となつて然るべき断片も散見する。また実際小説の素材として温めながら、作品とするに至らなかつたと見られる未完成の断片もある。日常身辺に知己が大勢あれば、そこで発散できたであろう内面の鬱屈やわだかまりさえも散見する。思い浮かぶままにとりとめもなく書き進めたかに見えて、思念の展開には割合筋道順路がはつきりしている。神仏、聖人、狐狸狼の性を論じ、儒者僧侶学者に歌人俳人、書家画家茶人、友人知己たちへの辛辣な一刺、痛快無比な筆法が、秋成の苦い心、孤独な心を垣間見させて、読者の心を離さない、不思議な魅力(みか)を秘めた作品である。

七十五才の筆に成る『胆大小心録』には、記憶の間違ひも少くないというが、ただ漫然と見過して来たものは、老の脳裡に何物をも残すことなく消え失せたに違いない。むしろ生涯を顧りみてこれだけのものを、なお書き残さずには死ねないと考えた、秋成の書くことへの執念の強さは、記憶力の問題ではなく、生涯を通して日常身辺の諸々の事象に、常に強烈な批判者、認識者として立ち合つて

来たことの証しであり、書かないでおいては、ひとつひとつの記憶の中に附着しつづける秋成の自意識が、空転し出場所を失つて窒息状態になるような思いではなかったのかと思う。秋成は最後まで、『書く』というデーモンにとり憑かれていたし、その意味ではまったく作家らしい作家であつたといつてよい。

秋成文学についての語り方が、最近では夢や幻想性の強調など、愛好者の恣意に引かれてか秋成文学そのものを離れ、論理のみが一人立ちする態のものが多いように思う。民俗学に文化人類学、それにフロイドやユング派の心層心理学が重なり合い、古典研究界にも影響を及ぼしていることの現われかもしれない。だが『春雨物語』は勿論のこと、『雨月物語』ですら、あの文体は決して夢や幻想の世界を彷徨する態のものではない。すべては（型通り）だし、文体は硬質でそして意志的ですからある。秋成が夢をよく見る体質であつたらしいこと、また異常体験をしたことも『胆大小心録』その他に記されてはいるが、それと『雨月物語』とを直ちに結びつけて考えるわけにはいかないだろう。この点については機会を改めて、具体的に述べる必要がある。

出生の秘密、不具であつたこと、宣長との論争の敗北など、秋成の内面生活を追及する手係りとして、触れるべき事柄は少くないが、今まで多くの人たちに言われて来たように、とりわけその出生についての謎は、秋成個人にとつて生涯に覆い被さる宿命の一大事であつただけに、彼の文学を解く鍵として大きな意味を持つてゐるに違いない。

上田家の養子として、養父母の期待と慈愛を一身に集めて育つた秋成は上田家の子になりきり家庭的にはさしたる不満もなく青年時

代を過したと思われる。「老懶元来不遇薄命、実父生死不知、実母只一面耳、養家ニテモ母二人有之」と、六十七才の時実法院主へ送つた書簡にはあるが、供養を希望する親族六名のうちに「実妣釈妙善 明和九庚子五月廿九」と、実母の没年をも（気憶違いの説もあるが）はつきり記しているところから、実母の消息のあらまはしは、彼の耳にも伝わつて居たことが分る。問題は実父であるが、先の書簡以外には『自像管記』の「無父不知其故」があるくらいで、殆ど何も語らないのに等しい。実父の何者であるかを秋成は知つていたかどうか、これはあくまで推測による他はないが、実母の故郷を訪れ、母方の従兄弟たちとも交渉を持つていたことから、父親について彼が何も聞かされていなかったとは、殆ど考えられないことである。ただ秋成はそれをついに生涯語ろうとしなかつた。秋成の父親を小堀左門政報であるとする、最近有力になつて来た説は、秋成が語れなかつたことを裏づけるものとして、筋道が通つてゐる。ただ秋成が素性の正しい旗本の名家の末裔としての自分をどう受け止め、そこに何を考へていたのか、それを察知するのは本当をいふとそれほど簡単なことではなさそうだ。

三井は浪人者、白木やはきせる者、かうの池は小酒や、小橋やは古手や、辰巳やは炭や也。神代からつづいてある家のやうにほこる事おかし。老は、にくんで「茶やのはてじや」といふ。「いやたいこ持古なつたのじや」。こたへる。穢多でさへなけりや御めんの人交わり、何にもせよかし、ただ今は山の大将我一人。お相手がござらしやるまい。『胆大小心録』

は晩年の心境だが、やはりここに至つても出生へのコンプレックスは消滅していない。「茶やのはてじや」は、曾根崎生まれだとする世間の噂を受けての事だが、藤田頌の『歌島稲荷社歌詠和歌序』にも、「先生撰津曾根崎生而」と、曾根崎生まれの事を記している

から、冗談ではなく本気で書いてるのである。茶屋でも炭屋でも同じ事さという言葉には、屈折した想いを抑え隠しての、にがい開き直りがある。

人は己れの出生の秘密や謎を思うとき、生の根源、人間の存在の有りに様について深く問いかけ、思いを馳せないわけにはゆかないはずだ。その不可測性、現実への不信など諸々のものが自己の存在の真下から湧き起り、それはそのまま眼に見える現実の諸相を越えて、大古の闇の世界にまで拡大していくことだろう。怪異や変化のみを言うなら、江戸文学の全てがそうであるが、ただならぬ緊迫感をもって、人生の決定的な姿態相貌として現出し、それが実になまなましい臨場感をもって描かれるのが秋成文学の特質である。おのれの出生以前の大古の闇こそ、秋成にとっては人間の生の根源であり、その闇から現出する諸々の物は、現実に裏切られた人間の失望と未練と怨念の化身であるのも、当然といえば当然のことであつた。

秋成六十八才、享和元年秋九月に成つた『歌島稲荷献詠和歌』の自筆添書によれば、彼と歌島稲荷の因縁浅からぬことが示される。それは幼時重症の疱瘡で生命が危ぶまれた折、悲歎にくれた父親がこの稲荷に助命を祈願し、九死に一生を得たことである。藤田頌の序はも少し詳しく、父母が深夜歌島稲荷に祈願すると夢の告げがあり、子を想う愛情の切なるに感じ、当今の死を免じ六十八才の寿を与えるとの神託を授かる。夢が覚めると病は漸く快方に向い、遂に平復した。父母は汝の生命は神徳の賜物であるから、ゆめ神徳を忘れてはいけなと、常々秋成に教えていたという。当時としてはさして珍しい話ではない。ただ父の無い子秋成が、改めて神から六十八才の寿を授かることの意味は小さくない。歌島稲荷の信仰はその時以来のものだが、祭主権の頭が狐憑きを落す名人で、秋成もその場を瞥見したことがあるらしい(『胆大小心録』)。「きつね人に近

よる事なし。もとより渠に魅せられると云ふはなき事也」とか、「狐つきも癩症がさまさまに問答して、「おれはこの狐じや」といふのじや。人につく事があらふものか」というのが、秋成と親交のあつた中井履軒など儒者たちの見識である。秋成が幽霊物がたりをすると履軒は「妖怪はなき事也」と秋成を恥かしめたという。これに対する秋成の反論の論拠は二つある。

狐も狸も人につく事、見る／＼多し。又きつねでも何でも、人にまさるは渠が天稟也。さて善悪邪正なきが性也。我によきは守り、我にあしきは崇る也。狼さへよく報ひせし事、日本紀欽明の巻の始にしるされたり。神といふも同じやうに思はる、也。よく信ずる者には幸ひをあたへ、怠ればたゝる所を思へ。仏と聖人は同じからず。人體なれば、人情あつて、あしき者も罪は問はざる也。

と、異類や神は「善悪邪正なき性」で、よく信じるものは守り、信を怠れば崇るだけ。佛や聖人は人体を具備するから情もあり、例え不敬の仕打ちがあつても罪を問わない事もあると、異類や神を佛や聖人と分明に識別する考えを持っていた。原始的アニミズムへの回帰とも思えるこの感覚は、勿論秋成の文学の母胎なのであるが、この「善悪邪正なき性」のもと、変幻自在に交流交信するとき、人間は真に自由であり、現実の秩序からも解放されている。歌島稲荷に依り、六十八才の寿命を改めて授かり直した秋成には、異類や神のこの性については、確信に近いものがあつたはずである。

儒者たちの「妖怪はなき事也」に対する反論のもう一つの根拠に、秋成が何度か神秘体験をしたことが挙げられる。一回目は賀茂川東岸から銀閣寺前の浄土院へ行くのに、吉田の丘の北をめぐつて東に行く順路なのを、どういふわけか白川の里に出ってしまった。ようやく浄土寺村に辿り着き、用を済ませての帰途、またまた方向感覚を失つて百萬遍へ出てしまう。ここで「狐道をうしなはせしよ」と「氣

付いたが、精神は確かだったという（『胆大小心録』）。二回目は北野天満宮に詣でた折のこと、これは歌島稻荷に許容された六十八才の寿命も、ようやく尽きる享和元年の師走、しかも天満宮は彼の氏神で、月毎の参詣を怠らず篤く信仰する神であった（『北野加茂に詣づる記』『胆大小心録』）。すでに妻瑚璉尼を失い、親友小沢蘆庵、論敵本居宣長も鬼籍の人となり、この頃はとりわけ「死」の影を強く意識していたのである。

「夜べより雲がちなる空の小雨打注ぐと見しを、行く／＼降りまさりぬ。御前にねぎ言みそかに申し果て、まかんづる程、いよく降りしきて今出川通の例の道を踏みたがへ、一條の方へ迷ひ来ぬ。雲は地にや落ちけん、足のもととも小暗くて、只倒れじとのみ見張りつ、歩む／＼くらき眼に」、東を指して歩むつもりが南はるかに迷い来て、二條の大路に出てしまう。気をとり直して東へ方向転換するが、また歩みは西へ向く。結局雨中をずぶ濡れになりながら彷徨し、辛うじて庵へ帰るなり二日間、「まなご暗み心ほれ／＼しく、夜昼牀にのみべ臥しぬる」と、この折の体験は忘れぬものがあったらしく、二度に亘って記している。その後さらに師走二十四日、北野天満宮の「汝休せよ」の夢告を受け、漸く精神的危機を脱したものと思われる。翌春の春の到来を喜ぶ河原面の市町の賑わいを描く筆先に、また新生の春の到来を喜ぶ秋成の心持が重なって、読む者の心を打つ（『北野加茂に詣づる記』）。死から再生へ、その後晩年の秋成の仕事はどう変って行くのか、今それを論ずる余裕はないが、『胆大小心録』は死と再生を経験した後の、文字通りの「精神生活の総決算」であったことに間違いはない。

天満宮参詣の折の体験も、秋成には「きつねの道うしなはせしか」で、友人の細合半齋に同様な経験があることをも例証に加え、「学校のふところ親父（竹井履軒を指している）、たま／＼にも門戸を出

でずして、狐人を魅せずと定む。嗤ふべし／＼。」と反論する。

「狐は人につかぬものといふ先生は、どこぞで化されさしやろけれど、外見ずの内ひろがりの見識ゆへ、是もきづかいあるまじく候」とか、「門を出ると、うきよの事にくらのいのが、学校のふところ子」（『胆大小心録』）というのが秋成の持説であるが、これは「そなたはさつても文盲なわろじや。ゆう霊の狐つきじやのと云ふ事はない事じや。狐つきといふは皆かん症やみじや」という履軒の意見に対する、秋成の反論の折の決まり文句であつたらしい。

狐憑きを信じないのは「うきよの事にくらしい」からだとするのは、歌島稻荷で瞥見した狐憑きなど、庶民社会に多く見聞したこの種の異常者に対する秋成の関心の深さ（ま）と、彼自身のこの種の異常体験とが重ね合わさったところから来ている。さらに歌島稻荷から六十八才の寿命を許されたことを考えれば、自己の運命に殆ど不可測的な神秘性を予感する他はない。秋成の場合、こういう神秘世界へ向けて自己の始源の像を追い求めて行くことが、強烈な自意識そのものの営みであつたのではないかと思う。

自我意識などといえば、近代資本主義社会に至って覚醒した、近代人特有の意識形態のように解されるも、江戸の中期以降の文人たちを見ると、ある場合には生半可な近代人よりも、よりいっそう強烈な自意識のかたまりで、そのたまたまは個性的ですらある。そして社会へ向けてそれが自己実現の原動力ともなり、ある場合には封建社会の壁の内側に閉塞して、己れをさいなむ自虐に転化させ、凄じい内面的葛藤を演じたりする。もちろん逃避や転向挫折など、現実との妥協のありようもさまざまだが、秋成はほぼ同時代の平賀源内などと共に、もつとも個性的な作者で、それだけに自意識をめぐる内面葛藤には深刻なものがある。

大場俊助氏の『秋成のテンカン症とデーモン』は、そういう秋成

の内面生活のメカニズムに精神病理的見地から照射を当てたユニークな秋成論で、今までの秋成論に欠けていた視点を提示したことで、一読した折の新鮮な印象は今でも忘れられないが、秋成専門家でもない私にも素朴な疑問は残った。筆者は周到にも「経歴の伝記としての〈作家像〉と「芸術的精神史のなかからとりだす新しい伝記学によって浮彫りされる〈作者像〉（心の肖像）」とを区別し、後者つまり「精神の肖像としての作者像を掘りだす」のだとされている。〈既知体験の幻視〉〈離人症の夢中遊行〉〈入眼時幻覚〉と〈仮睡状態〉〈思考化声〉などが、テンカン症独特の精神運動発作であるかどうか私にはよく分らないが、程度の差傾向の違いこそあれ、これらの傾向は殆どの人間が経験することで、秋成独特のものとも思えない。病誌誌として説明を受ける『御嶽精進』『秋山記』『ぬば玉の巻』『去年の枝折』『山霧記』『暁時雨』『癩癩談』『よもつ文』などの散文は、私の愛読して止まないものの中に入るのだが、大場氏の論に従えばテンカン症の精神運動発作時下の自動記述のような印象を持たされて、どうも違和感を感じてしまう。秋成が異常体験の持主であったことは認めるが、ものを書く時にも異常であったとは思われない。「狂気じみた氣質」「精神がいらだって激昂し」「心情がはげしく昂奮し」といった痕跡は、これらの文章の中にはあまり感じられないのだ。むしろ自然の中に自己を解放していく喜びが、温雅な文章の行間からわきのぼる態のものが多く、思考も感情も正常なのである。

しかし「テンカン症」を別にすれば、大場氏の秋成診断に示唆されることも少くない。それは秋成が極めて厳しい精神生活を送った人で、自己の真実を求めて輾転反側し、極限の状況にまで自己を追いつめて行く内面的烈しさを持つ人であったことだ。

秋成四十六才の秋九月、妻と共に城の崎温泉に湯治を目的に旅に

出て、それが『秋山記』にまとめられるが、十二日という日に出発したのは須磨明石の名月に期待するところがあつたからだろう。ざえある人も口とづるわたりを、まいて打出べうもあらず」と、磯山松の緑の美しさに目を奪われていると、妻が横から「いにしへ光源氏の君の、罪なくして流浪たまひしといふ跡はいづこそ——斯る所にも、年月ねんじ過ぎせけんよ」などといった悲しがる。「いと聞にくしとにや」とばかり、ここで秋成は「齢のほど五十にたらぬ法師」に変身し、彼自身の源氏物語論を展開する。「脚まへる様のつらつきして」というのは、妻に対してではなく、物語に対する少女的感傷趣味に対してであり、さらには「式部は石山の佛の変化なり」と、いと狂はしきまでほめなして、各々自己の道へ引き入れて気儘に解釈する、世間の源氏讚美者に対する冷静な批判者としての立場からである。内容は勿論秋成自身の妥協を許さない源氏物語批判論となつている。渺茫たる磯辺の空間を背景に、同じ松陰から忽然と姿を現わした何処の誰とも分らぬ初老の法師。紀行文であり乍ら、秋成は自説を妻に語り聞かせるといふ形式を避けた。避けたというよりも、極自然に自己から分身を抽出し、その分身の法師が秋成夫妻に語るという形式にしたのである。その物語論をここで検討する余裕はないが、自己の信念であり、云わずにはおれない自分分の文学論芸術論である。それは世間に沢山ある源氏物語論の一つなどという生やさしいものではなく、彼の骨肉と化した持論に他ならない。この松陰から現われた法師はあきらかに彼自身の自我像の原型である。

さらにその後直ちに筆を執つた『ぬば玉の巻』では、但馬城の崎に逗留した折つき合った隣人が持参した珍しい冊子が、この『ぬば玉の巻』だとしている。内容はおそらく中世期の戦乱時代、世に絶望して源氏物語を耽読し、廿四部も書写しつづけたという、架空の

いに任せて、秋成が校訂注解を施したとまで附記するのであるから、可成り手の込んだフィクションである。

宗椿は僅(朝顔)の巻まで書きすすめて来て眠りを催し、夢路に須磨明石の浦を辿る。月はなやかに海静かな、すかすがしい秋の夜である。ふと見ると「齢のほど五十には足らざる」「つらつきいと気高く、なほ人(なみの人)とは見え」ない人物が、松陰に敷物を敷き月を眺めている。人麿明神の示現である。時季といい場所がらといい、歌聖柿本人麿の霊が出現するにはまことに相應しい場面であつた。そうして人麿の霊が源氏物語を論評批判し、宗椿がそれを聴くという形で、秋成の源氏物語論を展開するのである。この場合宗椿も人麿も、秋成の自己像の投影であり分身であることに間違いない。秋成は最初分出した自己像の「五十にたらぬ法師」を、さらに歌聖人麿にまで昇華し得たという点で、その自信に満ち溢れた逞しい精神力を思わないわけにはゆかない。『雨月物語』を世に出し、医業に勤しむ頃の中期の秋成の精神生活は、したたかであり意志的であり、その想像力は決して病んでいとは思われぬ。

しかしこれを晩年の〈目ひとつの神〉に比したらどうだろう。人麿が正統なるが故に崇高であり權威そのものであるのに対し、『春雨物語』の〈目ひとつの神は〉、「目ひとつかがやき、口は耳の根まで切たるに、鼻はありやなしや」の奇怪な相貌で、深夜老曾の森の木隠れの、荒れ果てた社の中からゆるぎ出る。これが時に右眼を失明していた秋成自身の自画像であることは、今や読者研究者の間に定説化しているといつてよい。秋成の激しい自意識が繰り返して来た、我は何者であるかの自問自答は、迂曲屈折の末ついに、〈目ひとつの神〉という奇怪な自己像として結実したのである。

〈目ひとつの神〉の系譜は不分明であるが、貴族や文人知識人が人物塚の宗椿の夢語りという形式をとっている。持参した隣人の乞

思い描く文学神人麿像とは、可成りの距離があることだけは確かである。柳田国男に依れば、土俗の世界では人麿(人丸)は歌聖以前の、水辺に示現する土俗の神で、目一つの神と同じ系譜のものだつたというから、秋成は文学神柿本人麿として分出した自己像を、晩年には土俗の世界に引き降したことになるのであろうか。御霊神であるとか、鍛冶神であるとか、〈目ひとつの神〉の素性にはいろいろな見方ができるが、要は一つ目小僧に少しかり威厳を添えた態の、奇怪な土俗神であるとしか考えようがない。「一目連がここに在りて、むなしからんや」と、若者を羽扇であおぎ上げたところから、風水害の神として江戸時代に知れていた片目の龍神と、羽扇を手にする天狗との混淆イメージで成立している秋成独創の土俗神といつてよいだろう。

この〈目ひとつの神〉は、天狗を思わせる修験者、布袋風の法師、狐女房、猿や兔の野の獣までを眷族に引き連れ、歌道に執心して都に勉強をこころざす東の国の若者に、「ひとり行くには、いかでわがさす枝折りのほかに、習ひやあらん」と教え諭す。都に勉強をこころざしても今は無駄である。そこには師となるべき人など居ない。学問は秘伝の伝授などでは継承されないとする〈目ひとつの神〉の諭しの言葉は、勿論秋成の持説である。

奇怪な自己像〈目ひとつの神〉へ到達したとき、秋成ここではおのれの自我像の最終の形に遭遇したといふべきか。それは恐しく不気味な雰圍気にはつつまれているが、若者を教え諭し、「酒のめ、夜寒きに」と盃をすすめる情のある神でもある。老曾の森にくり広げられる深夜の饗宴は正常な眼には恐ろしいが、可笑味があつて何やら滑稽感が漂い諧謔の趣がある。これは大古の闇に跳梁する原始的の神々、土俗の神々の無邪気な姿でなくて何であらうか。

私は秋成は宣長との論争に破れたとき、徹底的な自我像の改変に

迫られたのではないかと思う。もしかしたらこれに、実の父親の素性を知ったという事実が重なるかもしれない。転々と居を移したのも、単に生活上の便宜を追っての事ではないかもしれない。闇に向つておのれの眞の姿を問いかける『曉時雨』や『癩癖談下』の末尾の部分は、この自我像改変の過程の苦悩に充ちた問いかけではなかつたか。鶯と蛙石の翁、うそ鳥駒鳥の對話に、にがい自己の姿を彫み込む苦しくも烈しい自己譴責、自己処罰の感情は、やがて「目ひとつとつ神」へ結実して行く過程の、精神の営みであつたといつてよい。

鳥が語り、石が物を言う。秋成が自我像の投影を見るのは大古の自然界の闇に対したときであつた。秋成の思想を「辺境的」だとされた森山重雄氏の評は、この点においてもまた適切であるといえる。

(注)

(1) 『岩橋の記』天明八年五十五才

(2) 頼桃三郎『秋成伝聞き書』(『日本文学』一九五九年六月)で、頼春水

『霞関掌録』にある秋成の実父に関する記事が紹介された。それに依れば秋成の実父は、大和国の一村里に領地を持つ旗本の子息が、その里の庄屋の娘と通じて生まれた子だとされている。高田衛はそれをさらに追及して、秋成の実父は小堀左内政報(小堀遠州の子孫)で、放蕩乱行の未知行地に蟄居の身となり、そこで庄屋末吉家の娘との間にできた子だとした(『上田秋成年譜攷説』)。その後さらに秋成の実母の家についての調査が精密に行われているが、秋成の実父についての確証はまだつかめていないようだ。(長島弘明『秋成の実母とその周辺』、『文学』一九八二年五月)

(3) 奇談的なものへの関心の代表的記述は『胆大小心録』(三三)にある。

「河内の国の山中に一村あり。樵者あり、母一人、男子二人、女子一人とともに親につかへて孝養足る。一日村中の古き林の木をきり来たる。翌日兄狂を發して母を斧にて打殺す。弟亦これを快しとして段々にす。女子も又組板をさ、げ、庖刃をもて細に刻む。血一掬も見ず。大坂の牢獄につながれて、一二年をへて死す。公朝その罪なきをあわれんで刑名なし。その他『秋山記』の色狂いの後家、『ますらを物語』や『死首咲顔』(『春雨物語』)の素材となつた源太驕動への関心などもそのなかにはいるだろう。

(4) 柳田国男全集巻五『一目小僧その他』

(5) 『胆大小心録』にもこの類の持説を記している。

(前略)又此古言をしいてとく人あり(本居宣長のこと。門人教への子と云て、ひろく来たるをあつめられし人あり。やはり此人も私の意多かりし也。伊勢の国の人也。古事記を宗として、太古をとくとせられしとぞ。翁口あししくして

ひ妨事をいふて也とも弟子ほしや古事記伝兵衛と人はいふとも
独学孤陋といへど、其始は師の教へにつきて、後々は独学でなければ
と思ふより、私ともいへ、何ともいへ、独窓のもとに眼をいためて考
えてみれば、どうやら知れぬ事も六七分はしれたぞ。(五)